



|                    |  |
|--------------------|--|
| <b>Title</b>       | <b>初級後半における物語創作活動; Story-making Activities For Pre-intermediate Learners Of Japanese</b>   |
| <b>Author(s)</b>   | <b>Mito, A</b>   |
| <b>Citation</b>    | <b>The 9th International Symposium on Oral Proficiency Interview (OPI), Hong Kong, China, 2-3 November 2013. In the Proceedings of the 9th International Symposium on Oral Proficiency Interview, 2013</b> |
| <b>Issued Date</b> | <b>2013</b>  |
| <b>URL</b>         | <b><a href="http://hdl.handle.net/10722/204967">http://hdl.handle.net/10722/204967</a></b>   |
| <b>Rights</b>      | <b>This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives 4.0 International License.</b>   |

## 初級後半における物語創作活動

水戸淳子(香港大学)

### 1 はじめに

初級の後半になると、語彙や文法知識もかなり蓄積され、日本語で様々なことを理解・表現する能力が備わってくるが、学習者によっては頭の中にある知識が発話や作文といったアウトプットに結びついていないように見受けられるケースもある。それには表現意欲や不安といった情動的な要因も影響していると考えられる(Rod, 2012)。筆者は表現の自由度を増すことによって意欲を引き出せないかと考え、短いストーリーを創作する活動を取り入れてみた。その実践活動について報告する。

### 2 物語創作活動について

筆者がこの活動を取り入れたのは、担当している香港の大学での初級後半の学習者を対象とした、「話す」「書く」スキルに焦点を当てた授業である。

今回試みた活動は「ある人物が描かれた絵を見て、その人の出で立ちや身に付けているもの、表情などから、その人についてのストーリーを自由に作ってみる」というものであった。この活動は『フィンランドメソッド実践ドリル』に出ている例を参考にし、絵もここに出ているものを使用した。またアイデアがあまり浮かばない学習者が参考にできるように「その人の性格、特技、趣味、夢、弱点について考えてみよう」という創作のヒントも合わせて紹介した。

### 3 活動の手順と内容

最初に行った活動は「書く」活動である。授業の中でストーリーを書き始めてもらったが、あまり時間が取れなかったため、宿題にし、後日提出してもらった。その後教師から文法的な添削およびコメントを添えて各学習者に返却した。さらに学習者全員が書いたものをまとめて文集にし、後日授業内で発表し合う活動を行った。

次に学期末の口頭試験において別の絵で同じようにストーリー作りをしてもらった。準備の時間は1分とし、メモを取ってもいいことにした。話す時間については特に制限を設けなかった。

### 4 結果の考察

「書く」活動においては時間を自由に使って書いてもらったため、使用語彙や文型も豊富で、内容も独創性が高いものだった。特に語彙は各自が想像するストーリーに合わせて新しく自分で開拓していることがわかった。それに対して、口頭試験におけるストーリー作成は準備時間も1分だけでほぼ即興に近い形であり、またこれが試験であるというプレッシャーや間違えたら減点されるかもしれないといった不安からか、内容も文の構成もシンプルで使用する語彙も使い慣れている言葉が多く選択されていた。フィラーや言い換えが非常に多い学習者もいた。また使い慣れている語彙で間違いなく話そうという意識から

か、ストーリーの構成や内容は似たり寄ったりなものが多かった。

また、こういったタスクを学習者に課す場合、自分にとって得意な「おはこ」の内容に終始していつもストーリーを作ってしまうという可能性があることも、ある学習者の例からうかがえた。

全体的にストーリーの構成という点では、教師がアイデアが浮かばない場合の助けとして出した「人物の性格、特技、趣味、夢、弱点」が殆どのストーリーで基本的な枠組みとして使用されており、これに則った形でストーリーラインが構成されていた。自由にストーリーを構成していいとはいえ、ストーリーを一から考えるのは大変だと感じる学習者にとってはこういった枠組みがあるとその中で創造性が発揮しやすくなるのかもしれない。その反面これによって型ができてしまい、これを超える創造性が発揮されなくなってしまったという可能性もある。

## 5 おわりに

初級の外国語学習者にとって課題とされる表現活動の多くは、自分や自分の周りの人、身近な事について表現することに焦点が置かれており、今回筆者が試した活動のような、架空のストーリーを創作するといったフィクション創作活動はかなり少ないように思える。これは検証したことではないが、筆者の感覚で言えば、「書く」活動において学習者は非常に意欲的であり、表現したいことを日本語にするべく電子機器を用いて言葉を調べていた。初級ではあまり creative writing というのは扱われないトピックではあるが、このような、架空の内容について、自分や自分の身の回りのことについて伝える時には決して使わないような表現を使い、自由勝手に短いストーリーを構成する活動というのは、初級からでも十分でき、学習者の表現領域を広げる上で役に立つのではないかと思われる。今後こういった初級からの表現活動の可能性について考察していきたい。

### 【参考文献】

- 諸葛正弥(2008)『フィンランドメソッド実践ドリル』毎日コミュニケーションズ
- Rod, E. (2012) *Language Teaching Research & Language Pedagogy*. UK: John Wiley & Sons, Inc.
- Kenny, S. (2011) “Teaching Creative Writing in an ESL Context” *Outside the Box: The Tsukuba Multi-Lingual Forum*. Vol. 4.
- Honda, M. (2011) “Creative Writing in Pairs: Pedagogic Possibilities in Japanese University EFL Classes” *Komaba Journal of English Education*. Vol. 2.